

ESD コーディネーター 原 明子

今はネットで何でも情報をザルのように浴びる時代だが、いかんせん量が多すぎる。浴びているうちにいったい自分が何を探していたのかすっかり忘れてしまうほどである。

人類文明の転換期にある今の持続不可能な社会のあり方を見直して、多様な人たちと、持続可能なよりよい社会になるように学び、実践し続けること、それがESD（持続可能な開発のための教育）であるが、この困難な問いに向かい続けていくためには、自分で学び続ける力がモノを言う。

その絶好のトレーニングが図書館でできる。図書の間は誰にも強制されない。自由な時間である。膨大な人類の歴史と知見・創造力の蓄積のなかから、自分が読みたいものを読む、見る、調べたいものを調べる。わからないことを質問する。それができるように、そこには必ず司書の先生がいて、上から教えるのではなく、相談に乗ってくれ、ひとりひとりの学びと成長に寄り添ってくれる。さらに大きな知の世界への扉を開いてくれる。（司書の先生抜きで図書室は無法地帯に置き去りにされた幼子のようなものである）

そこで得られた「ひとりひとりの」豊かな経験は、それぞれの人生を豊かにし、岐路に立つときの支えとなり、かけがえのないものとして輝かせてくれる。

そんな学校図書館がいつまでも司書の先生とともに子どものそばに寄り添い続けてくれることを切に願います。

元岡山市文化政策部長 長崎 司

岡山市の学校図書館の充実を願う

ある時期、岡山市の学校図書館は、学校図書館の充実を願う全国の父母たちから「夢の国」と言われていた。学校図書館の充実に向けた学習会が全国各地で燎原のように拡がり、ここでは小学校・中学校の学校図書館に「人（＝学校司書）」のいる岡山市の学校図書館の活動を撮影した映像は全国で上映され、岡山市の学校司書の方々は全国で自分たちの実践を報告して回った。そして、少なくない自治体で、学校図書館に「人」が置かれていった。そんな光景を私は見てきた。

岡山市の学校司書のみなさんは「ブックトーク」という手法で子どもたちを読書の世界に誘い、「調べ学習」など授業との連携に尽力し、子どもたちの育ちと豊かな授業、そして学校教育の展開に大いに寄与した。ある学校司書の方は言われていた、「私たちは草の根別けても資料を探し出す」と。その言葉に、学校司書のみなさんの矜持を見た。

そんな学校図書館活動を支えてきた学校司書のみなさんの中には、正規職員の人もいたが、嘱託というその職務に相応しくない不安定な身分で働くことを余儀なくされていた方も少なくない。しかし、嘱託という身分でも、岡山市の学校図書館を一生懸命支えてこられた。そうした方々を、私はいつも見つめてきた。

今、子どもの育ちの危うさが様々に指摘されている。私は思う、子どもたちは「私たちの国・日本の宝」だ。そのために、大人たちは力を合わせるべきだと。そんなことのために、国や自治体は財政を投入すべきだと。

今、改めて、全ての学校図書館に「専任、専門、正規の職員（＝学校司書）」を配置すべ

き時期だと私は考える。そして、その先頭に岡山市が立ち、学校図書館の充実の施策を展開すべきだと。それは「学校図書館の夢の国」と言われた岡山市の責任でもあると思う。